

「失感情症」と診断を受けた少年が、成長していく物語

先月、「本屋大賞」が発表されました。その中の「翻訳小説部門」で受賞したのは韓国の小説『アーモンド』（ソン・ウォンピョン／著矢島暁子／訳 祥伝社）。脳の扁桃核（アーモンド）が先天的に小さいため、喜怒哀楽をうまく感じられない世界で生きている少年・ユンジエの成長物語です。

ユンジエは幼い頃に失感情症と診断を受け、たった2人の家族である母と祖母のサポートを受けながら日常生活を送っていました。様々な感情の中でも特に恐怖を知らないため、十五歳の誕生日、通り魔に襲われ、目の前で母と祖母を一度に失うことになって何も感じず、見ていることしかできませんでした。一人で生きていくことになったユンジエは高校でも孤立していきます。そんな彼の前に現れた同い年の少年、ゴニ。ユンジエと対照的に激しい感情を持つ余り、問題ばかり起こしていました。ゴニはユンジエに事あるごとに突っかかりますが、何も感じず恐れる様子もないユンジエの事情を知り、興味を持ちます。一方ユンジエも母と祖母のような事件がなぜ起こるのか、世の中をもっと知りたい、だからゴニを知ることは必要だと思い、2人は交流を深めていきます。母と祖母からたくさんの愛情を受け育ったユンジエと、幼い頃に親元からさらわれて愛情をうまく受けられず育ち、周りから誤解されるような行動ばかり取るゴニ。2人の間には次第に友情ともいえるものが芽生え、ゴニはユンジエに「何も感じられないというのはどんな感じか」問いかけるようになります。しかしユンジエも疑問を持っていました。目の前で母と祖母が襲われた時も、テレビのニュースで悲しい現実が報じられている時も、人々は共感するように見えて何もしないのはなぜなのか。そしてとある事件が起こり、2人は大きく変わっていくことになります。

人は人と交わることで変わっていける

コロナ禍の今、息苦しく閉塞した空気を感じます。そうになると、気持ちも内側にこもってしまう自分に気づきます。でも人は人と交流することで成長していけるのだな、ユンジエの姿を見て、そんな当たり前のことに改めて気づかされました。そして、「共感する」「（相手を理解しようと）想像する」ことも問われているように感じます。「関係ない」で終わるのではなく、「なぜそういうことが起こるのか」を考える。お互いの立場を想像し、自分のできる範囲でもいいから助け合うことで、この難局を乗り切っていければと思いました。成長していくユンジエの姿に勇気をもらえる1冊です。